

# 高校初級作文指導の一試論

— 用字・用語・表記等について —

永 田 友 市

安岡章太郎氏が、小学校へ行っている自分の子供の作文を見ていると、熟語の意味はわかっているようでも、それを正しく使うことは容易ではないということを書いている。（「文学界」39年8月号）。「～にこしたことはない」ということばを使つて短文を作るのに、「～のほうがよい」という意味だというわけで「わたくしはおかずの中でコロッケとハンバーグにこしたことはない」という文を作つていたというのである。～の所には動詞がはいらなければならないのに、名詞を使つたところに誤りがあるのだと安岡氏はいう。N高校のM氏の、やはり作文教育についての話の中に、「～にふける」（「思索にふける」などの「ふける」）の～の所には英語でいえば動名詞 *gerund* がはいらなければならぬことを問題にしなければならぬという話があつた。こういう用語の誤りが多いということは無限にある。遠藤嘉基氏が、学生の論文の中に「……ということを順に調べてゆくと、～という問題がうかびあがつてくる」という意味の文に「洗滌」だとか、「勃起」だとかいうような無用な医学用語・性用語を用いている、ということを書いておられたのを読んだ記憶がある。わたくし自身も学生時代に「毀誉褒貶」ということばを主体の受動的な立場で用いることを知らなくて注意された記憶があるし、A新聞に「歩き<sup>×</sup>ず<sup>×</sup>く<sup>×</sup>め<sup>×</sup>で巡視」というようなタイトルがあつたのを知っている。大人ですらこうだとすれば、いわゆる一流校でない高校の初級の生徒の書く作文に用字用語の誤りがあることなどは普通のこと、これを無くすることは百年河清を待つに等しかろう。

しかし、あきらめてはなるまい。文部省の「高等学校指導要領」にはこういう用字・用語・表記等の技術面の指導のこともとりあげてある。そこで、わたくしは、主題のきめかた、構想のたてかた、論旨の展開の方法等々、作文教育の到達点がそういう点にあることは十分に承知の上で、ここでは、もつぱら形式面、技術面に限つて所感や現実の状況をのべてみたい。作文教育について話しあうと、えてして愚痴と嘆息に陥りがちなのだが、あとの処理や評価の問題、週20時間にあれこれの校務をもつ現場の教師として、いつわらぬ姿としてお許し願いたい。

作文のテキストなどには、用字・用語等に関しては大体次のような項目があがつている。

- (1) わかりやすいことばを用いること
- (2) 不適切なことばを用いないこと
  - (イ) まぎれやすいことばを用いないこと
  - (ロ) 自分かつてな造語を用いないこと
  - (ハ) 表記（かな・漢字）の誤用をしないこと
- (3) 慣用語・慣用連語について
- (4) 主語の省略について
- (5) 主述の呼応について
- (6) 修飾・被修飾について
- (7) 接続語の用法について
- (8) 副詞の呼応について
- (9) 指示語について
- (10) 助詞の使い方について
- (11) 敬語について
- (12) 文末語の統一について
- (13) 符号の使い方について

これらの一つ一つについて誤用例をあげればいろいろあるわけだが、最近わたくしの学校の1年生に課した作文の中から、誤文・悪文の例をあげてみる。前述の項目にしたがつて整理してないがお許し願いたい。

（×誤字 一問題個所 <読点のいる所）（部分訂正でどうにもならないものは、符号もつけてない。）

一諸<sup>×</sup>に 会開式 古い地図と位<sup>×</sup>べる 小学校6年の  
項<sup>×</sup> 全々<sup>×</sup>だめだ 専門<sup>×</sup>的 脳<sup>×</sup>まされた 借<sup>×</sup>すと貸<sup>×</sup>り  
る

切つてもはなせない関係 知識の向上、しいては文化の向上に役立つ。地図には地面または水面が含まなければならぬ。（辞書は）私たちが見るとどんな立場にあるだろうか。辞書を使いわけれる。辞書なしにはやつていけない。地図についていわざわざいただきます。参考書がなくとも、図書館さえ利用すれば必ず償いはできる。書物を保在し必要な時に利用される。これが図書館に対する共通な意味である。

（辞書は古代にはなかつたが）でもその時は別に不

便を感じなかつたと思う<sup>√</sup>現在<sup>√</sup>はちがう<sup>√</sup>なくてもあつても使わない人はなんら別にかわりない。

ふつうの時は目もくれず辞書をめくるのもいやな気持であるのは僕自身本当のことをいうとそれは、正しいようだ。

図書館とは勉強するところつまり学校ということになると思うが、学校は集団生活であるが図書館は、自習するところであり先生もいない。

したがつて他図を、見るということは、文芸書を読むに等しい程の、価値があるのではないだろうか。

(私は図書館へはあまり行かない。) なぜかという<sup>√</sup>と、読書が大好きでないこと、図書館に、<sup>√</sup>はいつている人たちが、みんなまじめで、教養があり、私より人間的にりつぱに見えるからである。

仮に、真剣に、本を読んでいる人の、よこで大きな声で話したり、笑つたりしているとすれば、はたして本を読んでいる人は、本の内容をつかみとることができるであろうか。

僕が図書館を本当によく利用しかつ<sup>√</sup>でかけはじめたのは中学1年ぐらいである。

私たち学問を、志す者にとつては、辞書は、「宝石よりも尊い」といつても、決していいすぎではないと思う。

空想が現実的であろうがなからうが、地図は私を楽しませてくれる。

まことにはずかしい次第だが、これが現実の姿である。誤りの性質はいろいろである。誤字・脱字・論理の矛盾、標準化されない口語の混用、句読点の不適正、等々である。

次にこれらの具体的な指導について述べておきたい。

① もちろん、自由作文(題を与えても、とにかく原稿用紙何枚かに書かせるもの)の際には、誤字や問題の箇所を正したり、指摘したりの添削はできるだけする。しかし現実には220人の作文を数日で添削し、評価するのは容易ではない。(書くよりも口でいう方が楽と思つて、休み時間や放課後の時間に面接して、個人指導をすることもあるが、これも負担はやはり大きい。1人に5分をかけて誤字を書かせ、主題のとり方や構想、段落のことを話しても、1時間に10人、1クラスに6時間はかかる。)

② 漢字については、作文としてではなく、わたくしの学校では1年生に漢字の学習書を持たせてカキトリの練習をさせているが、カキトリの試験には出来

ても作文となると誤字が多い。前述の諸一字のほか、複・初の衣偏を示偏にする者、陰・検・儉、観・歆、績・積、祖・粗・租、栽・裁、孤・弧、妨・防・紡、懐・壞、除・徐、脳・惱などの混用が多い。さらに細かいことをいえば、抑・迎のつくりが柳と同じつくりになり、衆の下部が豚のつくりのようになり、段・具の画数が少なかつたり、展の下部が衣のように一画多かつたり、薄・簿・博・縛・敷のように右肩に点のある文字と専・穂・恵のように点のない文字との区別がつかない。わたくしは、ハク・ボ・バク・フのようにハ行音の文字は字源から説明して点があるのだと説明するのだけれども、なかなか徹底しない。学・栄・覚の上部と堂・党・当の上部とは混同する者も多い。

③ 読解と表現とは表裏の関係にあるわけで、現代国語の時間に理解と同時に練習をさせる。要約・言いかえ等をノートに書かせる。これは採点まではなかなかいかない。せいぜい発表させて正否をたしかめる程度に終わる。これは後述のことと関係するが、了解語彙を使用語彙にまで高めるために、たとえワン・センテンスでもやらないよりはましではないかと思う。

④ 現代国語の読解中に適宜に単語・熟語を与えて短文を作らせる。また、定期考査の際にも同様なテストをする。これも③と同様な目的からである。冒頭にのべた安岡氏の娘の宿題と同じである。例えば「対象」というようなことばを用いて短文を作らせたとき、「わたくしは〇〇大学を対象に勉強している」というような文がずいぶんあつた。「対照」との混同も多い。学習時間中にはobjectとcontrastとsymmetryとの違いをいろいろ説明しても徹底しない。西周の訳語がむずかしかつた<sup>√</sup>と今いつてみたところではじまるまい。また、主体と対象とを敵に對置する西歐的発想が、われわれ日本人に不得手だといわれるかも知れないが、この程度のことばは使わせたい。「関心」と「感心」などもテストに出して使わせてみた。

⑤ 句読点については、例示の悪文に示したとおり、つけすぎたり、つけ足りなかつたり、全くなかつたり、さまざまである。誤字にせよ、句読点にせよ、実際、学期に1回や2回の作文で赤線で添削しても生徒にはなかなか痛痒を感じさせない。わたくしは、いい方法ではないけれども、何か実際にかれらに損になる方法をとらないと句読点の習慣はつかないと思う。そこで、定期の試験で、「説明せよ」というような文章表現で答えなければならぬ答え、あるいは古典における口語訳でも、例えば反語の訳な

ど「……でしょうか、いや……しはしない。」などの「か」のところ、これらの句読点のないものは減点することにしている。くり返していうが、わたくしもこれを最上の方法とは思わないが、10年ばかりのわたくしの経験では、こうして1年たつとどうやら句読点をつけることだけはつけるようになる。もつとも、それが適当につけられるか否かはまた次の問題である。わたくしはある人に批判された。「それが国語の答案や作文だけでなく、英語や社会の答案にまで適用されていますか」と。わたくしは、そこまで十分調べていないし、また必ず成功しているという自信はない。しかし、やらないよりはましだろうと、この方法をとっている。

さて、次に、わたくしが述べておきたいのは、こうした用字・用語の問題のうちで、単語・熟語の問題特に慣用句の用い方である。主述の呼応も、助詞の使い方も大切だが、慣用句についてだけのべておきたい。慣用句といつてもいろいろある。

(イ) 漢文的故事熟語の類

我田引水・四面楚歌・呉越同舟・疑心暗鬼など  
これも数えだせば高校生として覚えさせたいものは100以上はあろう。

(ロ) ことわざの類

多ますます弁ず・水魚の交わり・ぬれ手で粟・ねこに小判・烏有に帰す・論より証拠など  
これもたくさんある。

(ハ) 成句の類

目がまわる・手があがる・口がうまい・足が出る・歯にきぬきせぬ・水に流す・二の足をふむ、など  
これも無限にあらう。特に体の部分をいう、いわゆる基礎語彙に関するものにはこういう表現が多い。

(ニ) 漢文訓読・西欧語の翻訳に由来するもの

～を未然に防ぐ・～に由来する・～をもつて自ら任ずる・～にほかならぬ・～せざるをえない・～のやむなきに至る・～禁をじえない・～を越える・～に価する・(視界)から消える

(以上の分類は必ずしも厳密なものではない。)

右のうち、わたくしは(イ)(ロ)については強いては使わせようとは思わない。(ハ)もそれに近く、習熟するにこしたことはないが、重視したいのは(ニ)、特に西欧的表現である。もつとも、その中には「～になんなんとする」「～にやぶさかでない」「～たけなわである」というようなやや古い言い方、あるいは「葉子は……これだけの心持に働かれていた」(有島武郎「或る女」)などのような、熟しきつていない表現はとらない。そのかわり、「～べく余儀なくされた」「～に終止符をうつ」「～自分を見出した」「～のそれ」「～を考

慮の外におく」などはすでに十分日本語となつているし、「会議を持つ」などもすでに日常語として使われている。こういう表現を吸収することによつて、日本語を豊かにする道が開けると思うからである。

河盛好蔵氏が何年前、NHKの「国語講座」で、愛情の表現について、日本語では「好きだ」ぐらいしかないけれども、西欧語には「あなたがほしい」「あなたを愛する」「あなたを持ちたい」等々、何種類もの表現があることを指摘していた。「雪国」の冒頭の文章のように、「愛すればこそ」(谷崎潤一郎)のように、西欧語に翻訳不可能な純日本的表現のよきもさることながら、西欧語の長所は長所としてとりいれたいと思う。こういうイディオムに習熟することは、ひいては発想の問題にもつながらないであろうか。わたくしは、用語の問題を単なる技術の問題にしないで、より高いものにする一つの脱出口がここにありはしないかと思う。

○ユークリッド幾何学を習いはじめるとすぐその魅力のとりことなつた。

○家じゆうにあふれた書籍が次第に私をとらえだした。

○公式そのものは私の頭の中にはなかつた。けれども、その公式を適用するのと同じ操作を、私は私流にやっていたのである。

——以上、湯川秀樹「旅人」角川書店「現代国語」——

ここには抽象表現や、擬人法があるが、単なる技術の問題ではないものがある。

○「白い蜘蛛」(永田注、アルプスの難所)は犠牲者をひとりもつかまえることができなかった。

○時間がどんどん過ぎてゆく。ところが、行く手の道はまだ高く、切り立ち、困難なものだつた。

——以上、ハインリッヒ・ハラ「白い蜘蛛」同上——

○ジュール叔父の手紙を見せたことが、この若者の躊躇をおしきつてかれの決心をかためさせた。——モーパッサン「ジュール叔父」——

○(コモ湖の周囲の山々は)すべてが気高く、優しい。すべてが愛を語っている。——スタンダール「パルムの僧院」——

ここにも抽象概念や抽象語を主語にし、自然を人格的なものとする発想がある。時間というようなものも、芭蕉が旅人に比喩的に表現しているのに、ハラは抽象的な「時間」そのものを把握している違いはないか。手塚富雄氏の論に、蕪村の「遅き日のつもりて遠き昔かな」が極めて具体的な体験的な時間を示しているのに、これがドイツ語に訳されたものを見ると、抽象的な

時間が蓄積されて「昔」が成立する。という哲学的な俳句になつてしまうという意見がある。（「二つの詩世界」＜現代知性全集17巻＞）わたくしはそれを思い出す。スタンダールにも、山々が愛を語るという極めて西欧的な発想がある。

論が飛躍しすぎたようである。これは読解の問題になつた。わたくしの言おうとしたことは、西欧語的慣用句になれさせることが、使えることが、技術の問題ではなしに発想の変革にまで発展できるのではないか、そこに用語問題の発想ないし表現の脱出口があるのではないかということであつた。しかし、いまここにあげた例ははなはだ高度なもので、「意味」という語一つ正確に使えない高校1年の生徒には所詮無理な話である。それはわたくしも承知している。これはわたくしの希望であり、夢である。現実ではない。しかし、この初歩のことは現国の読解のときに随所で試みているつもりである。例えば

○少年時代、私は豊臣秀吉を愛した。開拓者のスケールの大きさにも、魅力があつたのだろう。（湯川氏「旅人」）

をいろいろ言いかえてみよ、というふうに。

最後に、漢語——抽象概念をあらわす漢語についてのおきてを述べたい。これも右に述べたことと同じことなのだが、西欧的表現の特徴の一つは抽象的表現の豊かさにある。それが主語になりうることである。抽象概念は、当否は別として現にわれわれは漢語に頼らざる

をえない。したがつて、どうしても抽象的表現には漢語に頼らなければならない。高校生の年ごろといえ、おいおい抽象的表現もできなければなるまいと思う。わたくし自身の経験をふりかえつてみても、「価値」「文化価値」などという語の意味を教えられたのは中学3年であつたと思う。別に確たる根拠があるわけではないが、次にあげる程度の漢語は高校初級で使用語彙の中に入つてしかるべきものであると思うがいかがであらうか。

意味・意義 架空 過渡期 文化・教養 機械的  
鑑賞・観賞 直接・間接 機関 機能 主観・客観  
具体・抽象 原始 肯定・否定 需要・供給 消極  
・積極 創造・想像 先天的・後天的 対象・対照  
伝統 矛盾 動機 理性 理想

因みに、「普遍」という単語を3年生で使わせてみたところ、特殊—普遍、という対立だけは教えたし、知つてはいたが、「このごろ3時間目の放課に弁当を食べることが普遍的になつてきている」（わたくしの学校では4時間すんで昼食）というように「一般」と同じように考えるものが多かつた。「『一般性・共通性』というのにはほぼ等しいが、広くあてはまるとともに、本質的にあてはまるといふくらいの意味がある。云々」（中央図書「現代文事典」）ということはやはりむづかしいようであつた。

（愛知県立熱田高等学校教諭）